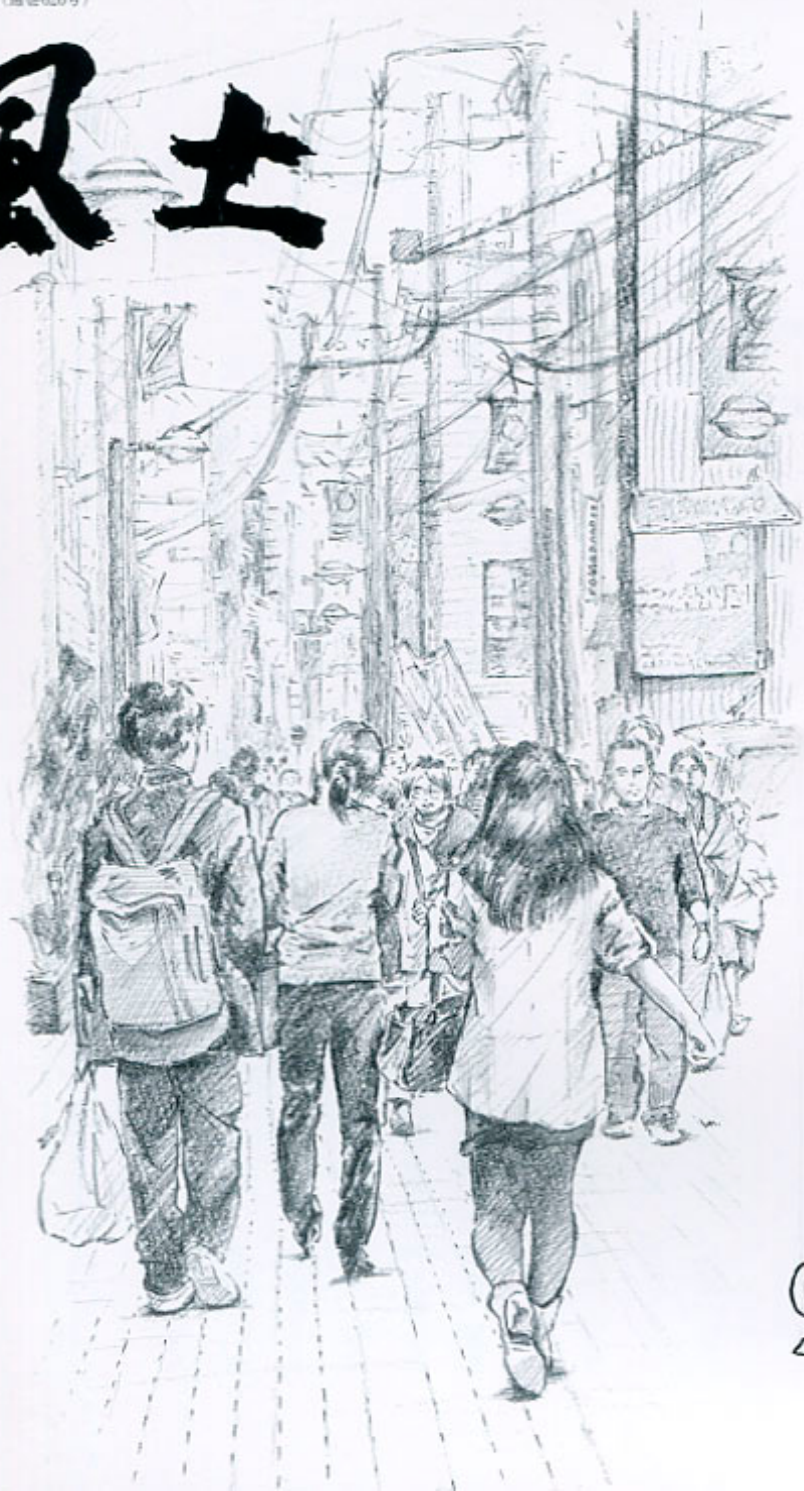


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年9月5日発行(毎月5日1刷発行)
第51巻9月号(通巻626号)

風土



門火焚く

神蔵器

墓に焚く炎天の火の涼しかり

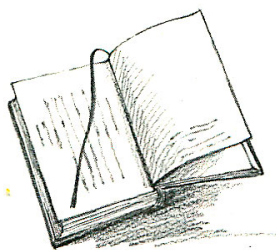
赤のまま母の行年四十九

涼しさやどこへも行かぬ墓一つ

ふるさとへつくつく法師聞きに行く

七月や十四代の黒薩摩

丑の日の煙りのごとく泥鰯かな
甘酒やひらひらひらと祭笛
神楽坂まつすぐ立てり盆満月
月下美人怒濤のごとく夜の傾ぐ
八月のてつぺんを行く乳母車
一身に地獄の釜の開く日かな
あかあかと真黒き海へ門火焚く



竹間集

同人作品



含羞草

門伝 史会

したたかに遣らずの雨や著莪の花
梅雨^{梅雨}を来て役者の揃ふ大首絵
泰山木離れきて雨匂ふかな
母の忌や雨に眠れる含羞草
雪月花と草書で書かれ麻暖簾
ほたるぶくろ今年は涙袋かな
参観日やごがとんぼに孵りけり

「淡交」以後(三十三)

野沢しの武

俳縁のおろそかならず木の芽和
鍵束を置く啓蟄の守衛室
父の漁舟軽く小突きて卒業す
どか雪まだ大方残り寺僧逝く
和紙に受け淡く影持つ鶯餅
春愁や弔問の髯剃らず出づ
ときに言葉交し日永の老夫婦

麻暖簾

鈴木 石花

被災地へメロスとなれず桜桃忌
椿山荘の蛩舞ひ込む芭蕉庵
眼科医の帰路駒形のどぜう鍋
天辺の大瑠璃しばし探鳥会
沢蟹の居場所常なる石の下
行き付けの小料理店あり麻暖簾
追伸に車検の報せ夏見舞

一本の麦

山路 紀子

目札に返す目札合歡の花
徹くさき地下の茶房にミントティ―
山鳩のくぐもり声や梅雨深む
一本の麦撓はせて雀かな
自転車の補助輪とれてさくらんぼ
とんぼうの亀の甲羅に翅休め
年輪の芯の空ろや蟬丸忌

万 緑

岩木 茂

万緑や良辯杉は天に入る
えご散つて矢代の海のしんと青
小判草一文銭の音のして
目高売る丹波篠山徒士屋敷
竹箒の音まだ止まぬ木下闇
涼風や蔭の中なる人の影
蕪村と母のあはひを夏の河流れ

枇杷熟るる

和沢有理子

遠き日を語る母の忌枇杷熟るる
聖書閉づ雷雨激しき夜をひとり
虹立ちぬ森の小さな礼拝堂
青桐に迫りし日暮れ隣家留守
母愛でし褪せし浮世絵曝しみる
遠雷や遊び疲れし児の熟睡
猛暑日の海雲すすりて胃を宥む

行々子

小林 輝子

梅雨近し馬の臭ひの残る街
捨て畑に捨て田に梅雨のはしりかな
晩年を急かされてゐる行々子
手拭を泥棒かぶり地笥採る
蕨採り忍者のやうに歩きけり
くちなはの首の銭形擲たれけり
魚止めの滝その先をいまだ見ず

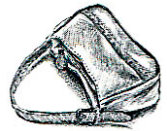
高 窓

— 瀬戸 悠 —

緑 さ す 高 窓 轆 轆 廻 し を り
ほ と ば し る 搾 乳 の 乳 遠 郭 公
搦 手 の な だ る る 厩 や 著 莪 咲 け り
飲 食 の 眼 と ど け り 枝 蛙
溜 池 の さ ざ な み た て る 初 伏 かな
蜥 蜴 の 尾 は み 出 て ゐ た る 野 面 積
卓 袱 台 に 昭 和 の 父 母 や 単 衣 着 て
え ご 咲 い て 海 賊 船 に 雨 が 降 る
遠 雷 や 猫 が 片 耳 た て て を り
土 用 芽 の 赫 と 父 の 忌 過 ぎ に け り

山河集

同人作品



神蔵 器選

さはさはと五月の志功記念館 土井 三乙

白壁が好きで今年も岩燕
田植とてまづ手拭ひを首に巻く
山独活を一本おまけしてくれし
その下に母と姉ある桐の花

高瀬川の一の舟入放生会 西村 雪園

創業は文政とあり冷奴
水郷の舟乗るまでの青田かな
夏の蝶低き花より高き花
夏空となりゆく雲の形かな

三溪に生糸一本雲の峰 鈴木みのる

棧橋に豪華客船梅雨に入る
えり足の白きがくぐる夏暖簾

時の日や村一番の古時計
南風や宝物殿の門開く

田水張る夕焼雲を動かして 高村 令子

満天の綺羅星へ積む植田かな
決心の着くまで歩く月見草
螢や石を出られぬ野の仏
螢の一つが闇を踏み外す

石仏は一丁ごとに山法師 雨宮 桂子

五月雨や蕎麦打つ音もする音も
萍や星のかたちに手をつなぎ
即身仏に朴一輪の重さかな
青柿や土の匂ひの観世音

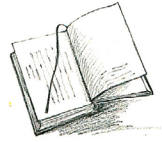
◇特別作品抄◇

八郎潟の秋

本間 羊山

みみず鳴くこの世の義理も日々果たし
蘆のこゑ躍起に風が伏せんとす
三倉鼻潟の素描の子規忌かな
潟風や鮎の供養碑苔の花
蟬声も地に誘はるる宮の杜
秋蝶の浮標ウヅマシのうなづく八郎湖
ほうたるの残像やがて夢となり
水底の藻屑を覚ます稲光
しばらくは水脈の乱るる撃れ鴨
潟までの視野眩しくて濡れ案山子

風土独語／神蔵器



ほととぎす 一声大河のはじめかな

林 いづみ

この句の大河は北上川である。「まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。『国破れて山河あり。城春にして草青みたり』(奥の細道)と、杜甫の詩を思い、芭蕉は笠を敷いて腰を下ろし、時の過ぎゆくまに涙を流した。

北上川は全長二四三キロメートル、源泉は岩手県北部の岩手・二戸(のへ)両郡界にある七時雨山に源を発している。盛岡から車で約一時間十分、目的の弓弭の泉に着く。左手の古い石段を七、八段上がると案内所があり、声を掛けたが人の気配はなく、さらに数段登ると観音堂があった。お参りもそこそこに右手に廻りその奥に目的の源泉があった。

源泉は雉木山のつづく裾に巨木の杉の木が二本聳え立ち、その奥の、落雷の爪跡も痛々しい杉の根元、あらわになった根の岩間からきれいな清水が湧き出していた。私は膝を折って両手で清水

を受けて飲んだ。この一滴もやがて大河となり、喜びかなしみ、ロマンを生み逃かなる流れとなるのだ……………。

「あ！ほととぎす」

と誰かが言った。私はとっさに顔を上げたが、ほととぎすの声は聞こえなかった。耳の遠い私にも松蟬がしきりに鳴いていた。

さはさはと五月の志功記念館

土井 三乙

志功は板画について「板刀が板木に切りこまれてゆく時、もう下絵から離れて、板が育って行く。身体ごと板画にならなければほんとうの板画が生まれて来ない」と版画と板画の違いを位置づけ、また「柵」についても。四国の巡礼の方々が寺々を廻られるとき、首に下げる寺々へ納める廻札、この札は、一ツ一ツ、自分の願いと信念を、その寺に納めていくというもので、志功の「柵」も自分の願所に一ツ一ツ願かけの印札を納めていくという心が、この「柵」の本心だと言っている。

友人の棟方志功記念館理事長の淡谷悠蔵氏は、「雲に乗れ志功」の中で次のようなことを書いている。

「志功はネプタが好きであった。ネプタ祭には必ず帰って来て、提灯を振りかざして、ラセラ、ラセラと先頭に立った。

要するにネプタが好きなのだ。ネプタ人形の火の色も、太い線も、原色に近い色彩も、笛もガガシコも、踊り子も、腹の底にひびく太鼓の音も、笛の調子もみんな好きなのだ。——中略——

やがてそのネプタ行列も崩れ、その一つ一つが送り絵を見せながら遠ざかって行く。太鼓も笛も遠ざかって行く。

踊り子達も、一人一人離れて行ってチャラチャラと鈴の音をさせながら、めいめい自分達の家に帰って行く。カラカラと音をさせて戸を開け、カラカラと音をさせて戸をしめ、その中に吸い込まれて、あとはひっそりと静まり返って音もしない。祭のあとの静けさと寂しさを棟方志功は知っていたとある。

志功はこの世界を、そのまま「おのれ」とし、「おのれ」のその感動、呼吸を一気に画とした。

掲出句の「さはさは」は形容詞ではない。

はらはらと散る桜の花、小鳥たちの美しい声、そして小学生の飛び出し、足をとられて転倒、目の前にあった三弁の小さな白い花の沢潟、生け花に使われることはあっても、田圃では雑草扱いされている沢潟を「ハア、きれいな花コ」「これが美しいということか」と飛行機のことなど忘れて拌んでいたという。

志功は生涯を通して純粹でありさわやかであった。「さはさは」は志功その人、五月の季語もよかった。

これは蛇足だが、私が桂郎先生の紹介で初めて投句した斎藤玄の「壺」の表紙が、棟方志功の美人画であった。終戦後間もない昭和二十三年頃で、誌代は二十円、三十二頁のざらざらの粗末な紙であった。私はその頃、胸を患って、絶対安静の日々が続いていた。

志功の絵は、表紙いっばいに健康的で豊かなお顔で、後年「門

世の柵」など数多くの「柵」に見られる、まさに一目で解る志功の理想的なビーナスであった。

(以下略)



風土集



神蔵器選

ほととぎす一声大河のはじめかな 東京

林いづみ

蒲の花水に風筋見えて来し

一振りの「康継」薙刀涼しかり

涼風の抜ける味噌蔵文庫蔵

源流へ青水無月の峠越ゆ

郭公鳴く祭の前もその後も 横浜

近藤幸三郎

公達の匂ひを放つ今年竹

号砲にしぶきの挙がるプールかな

絵硝子のマリア微笑む草の笛

雲の峰質屋に高き無線塔

梅雨晴や軍手に蝶の羽根ひらく 津山

生田恵美子

水盗む足音連れて人逝けり

炎天の蟻のごとくに会葬者

清め塩つまむ指先戻り梅雨

弔ひの手もて枝豆飛ばしけり

菩提寺は本尊一つ南風吹く 相模原

雲所誠子

潭身の一步を跳んで雨蛙

あぢさゐや波は返らず由比ヶ浜

水の面に全長正す山棟蛇

万緑やダム放水の合図ベル

ソフトクリームなくなるまでの波の前 奥久留米

竹久みなみ

パン屋出てその先の角実梅落つ

夏入日真直ぐささる飛行雲

夏至近し地球の裏へエアポート

山清水顔にぶつけてかつぶくむ

すずめ蜂バイクのやうに通る過ぐ 横手

森屋慶基

音立てぬ山の鴉や松の芯

早苗饗の朝や畑の石拾ふ

合羽着て田植の朝を声高に

水漏れを指先に診る植田かな